

日銀の視点

水戸の梅まつりが2月11日からはじまった。いち早く音楽園や弘道館を巡ってみたが、今年は気候の影響からか、開花が遅れ気味であった。まさに「探梅」の境地で、まだ寒い冬晴れの空の下、たくさんのつぼみの中に、ひっそり咲く梅の花を探しながら、のんびり歩いたのだが、これはこれで風流なものだと感じた。

振り返ってみると、初めて音楽園を訪れたのは、昨年夏、熱中症も危惧されるほどの猛

日銀水戸事務所長 稲見 征史

梅まつりに感じた光明

暑の日だった。園内に人気は少なく、木陰を求め、静寂の孟宗竹林や大杉林の中を、汗を流しながらひとり散策したことを思い出した。それを「陰」とすれば、梅まつりは、園内に人があふれ、春を待ち

暑の日だった。園内に人気は少なく、木陰を求め、静寂の孟宗竹林や大杉林の中を、汗を流しながらひとり散策したことを思い出した。それを「陰」とすれば、梅まつりは、園内に人があふれ、春を待ち

えてしまう癖が仕事柄、身に付いてしまっているらしい。今年の水戸の梅まつりが第129回であることに目が行った。単純に計算すると、1897(明治30)年が第1回だったことになり、これは現在と推測される。また、「領内の民とともに楽しむ場」との音楽園の開園趣旨は、5年程前まで園を無料開放していたことにも通ずる価値観の表われかもしれない。

最近の世の中では、「分断」や「極化」といったことがよく話題になるが、水戸の梅まつりの歴史とその開かれた思想を学ぶにつけ、現在のわれわれに示唆するものがあるように感じるのには私だけだろうか。

他方で、施設の維持管理には費用が必要であり、もとより音楽園には貴重な歴史的価値がある。入場料として、ある程度の対価を支払うのは楽しむ上で必要なことであるし、それにより、魅力的な施設として永続していくことを願いたい。かつて聞いた有識者の見解か、それを踏まえて私が思ったことが、今となっては定かでないが、観光地やその施設は、古きを残しつつも、少しずつ手を加えて変化させていく取り組みを通じて、今訪れた人への満足感と歴史的価値の両方を提供することができるとだ。梅まつりを起点に企画されている各種のイベントも含め、事業者や自治体による観光体験の価値向上に向けた施策に期待したい。

わびるように、お客さんの笑顔などにきわいを見せていた。半年の時を越えて斉昭公が唱えた「陰と陽の世界」という園のコンセプトを体験することができたのかもしれない。

どいつでも数字で物事を考

の常盤線が開通した翌年に当たる。当時、鉄道会社が臨時列車を走らせるなど、音楽園に東京から観光客を呼び込むうとしていたらしい。まつりの原点は、地元の初春の楽しみである観梅を外部に紹介していくことにあるのだらう